「尊厳死、安楽死問題」　　2017 年 02 月 17 日

私も時代に取り残されないようにと思っている。今年の芥川賞受賞作、山下澄人氏の『しんせかい』が掲載されている『文藝春秋　3 月号』を買って読んだ。脚本家や俳優を目指す人々を教育するために倉本聰氏が作った「富良野塾」に集まった若者群像を描いた小説である。村上龍氏が選評で「『しんせかい』には、強烈な要素が何もない。そして、わたしは、『それが現代という時代だ』と納得することはできない」と書いていた。同感である。若者は深く、捉え難い苦悩や葛藤や絶望があるのではないかと思うが、あまりに淡々と他者と関わり合っている状況を不自然に思えた。不即不離の関係を保つのが現代の若者なのかも知れないが、思想表現や心理描写が希薄なのが不満であった。若者について行けなくなったのか、何より、私には文学的センスがないということであろうか。

同じ 3 月号で「安楽死は是か非か」を特集していた。146 人の有識者にアンケートを送り、60 人から回答が寄せられた。アンケートは、「A 安楽死に賛成、B 尊厳死に限り賛成、C 安楽死、尊厳死に反対」の問いかけで、Aが 33 人、Bが 20 人、Cが 4 人、どちらも選ばなかった人が 3 人であった。安楽死に賛成の人が多いのに驚いた。

安楽死は回復不可能な状態になった時、薬物などで積極的に死をもたらすことで、世界の何ヶ国かが認めている。日本では認められていない。尊厳死は延命措置のために栄養や酸素の吸入、心臓マッサージなども止め、尊厳を持って自然死を待つ死である。かつては、延命が至上命題で、あらゆる加療をしていた。スパゲッティ状態で数年も意識不明で生かされ、舌は渇き切っていても、心臓マッサージで幾度も蘇生させられていた。最近は、医療現場が変わってきている。延命措置が付けられた場合は、取り外すことはできないが、それ以前に、医者に相談すれば、本人や家族の意向を受け入れるように対処してくれる。

喜劇役者の伊東四郎氏は、安楽死に賛成し「生まれた時はともかく逝き方を選ぶ権利はあってもよいのでは、と思います」と言い、映画作家の大林宣彦氏は「正しくは『死こそは当人の自由であるべき』です!」と述べている。賛成派は自分で死ぬ権利と自由を主張している。そして、十分に生き抜いたという自負を持っている人々のように思える。また、家族に迷惑をかけ、費用もかさむという事情も反映している。臓器移植が認められたため、貧しい子たちの命が売り買いされている現実がある。私は安楽死に反対である。安楽死を認めたら、社会的な殺人が行われるのではないかと恐れる。尊厳死に限り賛成の脚本家の内館牧子氏は「死は本人だけのものではなく、遺された人のものでもある。本人は『積極的な死』に満たされても、遺された人はその『自死』が一生頭から離れないだろう」と述べ、ノンフィクション作家の柳田邦男氏は「人間として最大にして最高の仕事は、最終章の日々をどのように精神性高く生きたか、その生き方や言葉は、やがて『死後生』となって、それまでの人生を共有した残された人の心の中で生き続け、残された人の人生を支えたり膨らませたりする」と書いている。お二人に賛同する。どの死も、遺された者にメッセージを残していく。それを聞き取ることが遺された者の責任である。私は 47 年間、牧師をし、100 人を超える死に逝く人と関わり、見送ってきた。召されて逝かれた方々が残したメッセージが、私を牧師として立たせてくれたと思っている。

美術家の横尾忠則氏は「生き物は全て自然死するようになっている。人間だけが特別ではない」と書いて、安楽死、尊厳死に反対している。死は私の手ではなく、神の御手にあり、死を覚えて生きることは、今を大切な時として過ごす大きな力であることを忘れまい。